

日本常民文化研究所

共同研究 日本常民文化研究所所蔵資料からみる フィールド・サイエンスの史的展開

期間：2016 年～

[所員] 泉水英計 小熊 誠 佐野賢治 高城 玲 平井 誠 廣田律子

調査フィールドの再検討——北海道、南洋群島、モンゴル

泉水 英計



写真 1 第 3 回公開研究会 大塚和義氏（2017 年 5 月）

日本常民文化研究所所員による共同研究「日本常民文化研究所所蔵資料からみるフィールド・サイエンスの史的展開」は、国際常民文化研究機構の第 1 期共同研究プロジェクト「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」と「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」を通して学史への関心が深められたこと、また、アチック・ミュージアム時代から研究所に蓄積された非文字資料および民族学振興会運営資料の整理が進み比較的円滑に利用できるようになったことから、民俗学と文化人類学および隣接諸学の史的展開の探求を目的として企画された。

この目的を鑑みて 2017 年度は 3 回の公開研究会が開催された。

まず、5 月に、大塚和義氏による「アイヌ民族文化研究の歩み」と題し研究歴の回顧を主軸にした発表があった。本邦の文化人類学研究機関を代表する国立民族学博物館でアイヌ担当を長く務めた同氏の歩みは、日本社会におけるアイヌ文化理解の変遷をも明らかにした。大塚氏は、民族としてのアイヌはすでに同化したという理解や、民族文化よりも福祉拡充を求める動向に抗って、あえて伝統工芸を復活させ、その作品を博物館収蔵品として展示することでアイ



写真 2 第 4 回公開研究会 飯高伸五氏（2017 年 9 月）

ヌの文化的自尊心を培養し、アイヌが民族としての自覚を高めることに貢献することになった。

つぎに、9月に、南洋群島（ミクロネシア）におけるフィールド調査の歴史について飯高伸五氏と坂野徹氏の発表があった。飯高氏の発表は、杉浦健一が南洋庁嘱託としておこなった土地制度調査を再検討したものであった。しばしば観察される内陸部から海岸付近への集落の移動は、相続における母系氏族から父系的小家族への変化と連動していたが、杉浦のいうような文明化の一環ではなく、村落間闘争の禁止、湾岸道路敷設、屋敷地内埋葬の禁止といった植民地統治政策の帰結であったという。坂野氏の発表は、日本帝国海軍占領直後の学術調査団報告書『南洋新占領地視察報告』[文部省専門学務局 1916-17]を読解したもので、そこには後の委任統治領期とは相違する住民観がみとめられることを明らかにし、その要因を探った。

さらに、1月の公開研究会では、小長谷有紀氏による「モンゴルに関するフィールド・サイエンスの黎明期」と題する発表があった。小長谷氏は、梅棹忠夫のモンゴル調査資料の紹介と研究資源化を進めてきた。戦後日本を代表する知識人として知られる梅棹の文明生態史観や情報処理法は、戦中に張家口に設立された西北研究所での活動のなかにその起源があることが具体的に跡づけられた。

以上の公開研究会のほかに、泉水英計所員がハワイ大学およびホノルル芸術院において沖縄とミクロネシアのフィールド調査史に関する資料調査をおこなった。



写真3 第4回公開研究会 坂野徹氏（2017年9月）



写真4 第5回公開研究会 小長谷有紀氏（2018年1月）

■活動データ

2017年度の活動

- 第3回公開研究会「アイヌ民族文化研究の歩み」大塚和義 2017年5月31日
- 遠野フォーラム「伊能嘉矩 生誕150年」への参加 2017年8月20日～21日 泉水英計
- 第4回公開研究会「杉浦健一による南洋群島島民土地制度調査の検証」飯高伸五（高知県立大学）
「占領と視察—『南洋新占領地視察報告』とは何か」坂野徹（日本大学） 2017年9月27日
- 第5回公開研究会「モンゴルに関するフィールド・サイエンスの黎明期—みんなく梅棹資料から探る」
小長谷有紀（人間文化研究機構・国立民族学博物館） 2018年1月12日
- ハワイ大学所蔵沖縄朝鮮地誌資料の調査 2018年2月11日～23日
ハワイ大学ハミルトン図書館、朝鮮研究所、ハワイ大学法学部図書館、ホノルル芸術院資料室（ホノルル美術館） 泉水英計